The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在日朝鮮人教育における〈民族〉の本質主義と非本質主義 : 大阪府高槻市の在日朝鮮人子ども会活動を事例として
Author(s)	金, 泰泳
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29208
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	金（きむ）　泰泳（てよん）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　13605　号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	**在日朝鮮人教育における〈民族〉の本質主義と非本質主義 －大阪府高槻市の在日朝鮮人子ども会活動を事例として－**
論文審査委員	（主査） 教　授　池田　寛 （副査） 教　授　菊池　城司　　教　授　平沢　安政

論文内容の要旨

本研究の目的は，在日朝鮮人青年たちのエスニック・アイデンティティに焦点を当てることによって，在日朝鮮人におけるアイデンティティ・ポリティクスとその超克の可能性を探究することである。

1945年の第2次大戦の終結時，日本には約240万人の朝鮮人が「日本人」として生活していた。日本の敗戦によって，朝鮮に対する植民地支配が終わると同時に，日本に住む朝鮮人たちは子どもたちへの民族教育を始める。しかしその活動は当時のGHQや日本政府にとっては統治上好ましからざるものであった。そして民族教育に対する「弾圧」が始まるのである。以後今日に至るまで在日朝鮮人は日本社会からの「同化」の圧力に絶えずさらされることになる。

こうした環境下で在日朝鮮人は，彼らの文化的伝統を自らの本質とみなし，それをもって「同化」圧力への抵抗の手段とする〈アイデンティティ・ポリティクス〉を発達させてきた。在日朝鮮人におけるアイデンティティ・ポリティクスは当初，抑圧に対する抵抗の手段であったわけであるが，いつしかそれは在日朝鮮人社会内部の多様なアイデンティティのあり方を疎外するようになる。たとえば鄭暎恵が指摘するように，在日朝鮮人のアイデンティティ・ディスコースは，その伝統的な家父長的性格ゆえにきわめて深重な性差別の要素をあわせ持つものであった。在日朝鮮人女性にとってエスニック・アイデンティティを確立するということは同時に女性としての自らのアイデンティティを疎外・抑圧することでもあったのである。こうしたさまざまな矛盾の前に，在日朝鮮人のアイデンティティ・ディスコースは，“日本の支配文化に対する抵抗”と“在日朝鮮人の多様な個のあり方”との間のジレンマに直面することになる。そして在日朝鮮人アイデンティティ・ディスコースの「脱構築」が進められるのである。在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティはもはや従来考えられていたような一枚岩的なものではなく，多元的な様相を持つものだという解釈がなされるようになる。こうした状況はとくに青年や子どもといった在日朝鮮人の若い世代において顕著にみられた。

大阪府高槻市では1970年代半ばから，在日朝鮮人児童生徒を対象とする「子ども会」活動が行なわれている。教育委員会によって行なわれているこの活動は，在日の子どもたちのエスニック・アイデンティティの育成や民族文化の伝達を目的とするものである。論者はこの子ども会活動の場における調査活動を行なった。具体的には，子ども会に指導員として携わる在日青年や，かつて子ども会に生徒として参加していた青年たち，そして現在参加をしている生徒たちに対するインタビュー調査である。本研究はそれらのインタビューをとおして，アイデンティティ・ポリティクスの場としての役割を担ってきた「子ども会」をめぐる，在日青年たちのアイデンティティ・ジレンマの状況とそ

れを乗り越えるための模索を記述しようとしたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，在日朝鮮人青年たちのエスニック・アイデンティティに焦点を当て，在日朝鮮人をめぐるアイデンティティ・ポリティックスの歴史をたどるとともに，在日朝鮮人子ども会活動の関係者に対するインタビューを通じて，アイデンティティ・ポリティックスの超克の様相を記述したものである。

アイデンティティ・ポリティックスとは，民族マイノリティが支配文化から与えられた否定的自己イメージを肯定的イメージへと是正するために，自民族の固有性や優秀性を強調する運動のことを指している。本論文は在日朝鮮人をめぐるアイデンティティ・ポリティックスの生成過程をたどるとともに，その限界性を明らかにし，その超克の可能性を実証的に明らかにしようとしている。

本論文は，５つの章によって構成されている。第１章「問題意識」では，在日朝鮮人の教育をめぐる言説と，ポストモダン運動の潮流の中でその言説にゆらぎが生じていることを指摘している。第２章「現代日本と複数文化」では，ニューカマーの流入によって日本社会が多文化化しつつある現実にふれるとともに，実証的な調査のための枠組みをつくるためにエスニシティ論の理論的な整理を行っている。第３章「エスニック・アイデンティティのジレンマ」では，戦後社会における一枚岩的な在日朝鮮人のアイデンティティ観の生成過程とそれからの脱皮の試みを詳細に分析している。第４章「アイデンティティ・ポリティックスをこえて」では，在日朝鮮人子ども会の成り立ちと活動状況を紹介するとともに，それに関わった指導員や過去において子ども会に参加した青年や現在参加し活動している中学生を対象に綿密なインタビューを行っている。対象者に一人ひとりが在日朝鮮人アイデンティティに対してどのような見解を持っているかを，それとの格闘の過程を詳細にたどることによって明らかにしている。そして最後に「むすびにかえて」では，第４章の結果の考察と在日朝鮮人のアイデンティティのあり方についての著者の展望を示している。

従来在日朝鮮人に関する研究は，「エスニシティのカテゴリー化」に依拠した異化を強調したために，個人のアイデンティティの重層性や多元性のダイナミズムを必ずしも描き切れていたとは言えない。また，教育実践の場では体験論・実践論に重点が置かれてきたために，社会学的手法による実証性が欠けていた。本研究は，社会学的手法によって，在日朝鮮人アイデンティティの重層性・多元性をできるかぎり忠実に描写しようとしたことによって，従来のステレオタイプにはない生き生きとした在日朝鮮人の姿を描き出すのに成功している。そのアプローチは，被差別部落，障害者，ニューカマーの移民労働者，さらには女性など，マイノリティをめぐるアイデンティティと教育研究へと適用することにより多くの実りが期待できるものである。